

基準6 学習成果

(1) 観点ごとの分析

観点6-1-①: 各学年や卒業(修了)時等において学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、単位修得、進級、卒業(修了)の状況、資格取得の状況等から、あるいは卒業(学位)論文等の内容・水準から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点到る状況】

本学は半期ごとのセメスター制を採用し、セメスター終了時に授業科目の成績評価及び単位認定を行っている。3ヶ年度とも平均して入学者の96%程度の学生が、規定年数で学士の学位を取得し、卒業している(資料6-1-①-1)。資格取得に関しては、全国平均を上回る高い合格率を達成している(資料6-1-①-2)。

大学院修士課程については平成22年度に初めての修了生を輩出し、平成23年度については7名が修了認定を受けた。修了生は、それぞれ医療機関もしくは教育機関に就職もしくは復帰、あるいは博士後期課程への進学を果たした。(資料6-1-①-2)

資料6-1-①-1 規定年数で卒業した卒業生の状況

	21年度(18年度入学生)	22年度(19年度入学生)	23年度(20年度入学生)
看護学部	76 (92.7%)	76 (92.7%)	82 (98.8%)
診療放射線学部	34 (91.9%)	35 (97.2%)	36 (100.0%)
計	110 (92.4%)	112 (95.0%)	118 (99.2%)

※()内は入学者のうち、規定年数で卒業した者の割合

※平成20年度入学者数 看護学部:82名、診療放射線学部:36名
平成19年度入学者数 看護学部:82名、診療放射線学部:36名
平成18年度入学者数 看護学部:82名、診療放射線学部:37名

資料6-1-①-2 学部生の国家試験合格率の推移(単位:人、%)

＜平成23年度 第4期卒業生＞						
試験種別	卒業生	受験者数	合格者数	不合格者数	合格率	合格率 全国平均
看護師国家試験	83	83	82	1	98.8%	95.1%
保健師国家試験	83	81	72	9	88.9%	89.2%
診療放射線技師国家試験	36	36	36	0	100.0%	83.4%
＜平成22年度 第3期卒業生＞						
試験種別	卒業生	受験者数	合格者数	不合格者数	合格率	合格率 全国平均
看護師国家試験	78	78	77	1	98.7%	96.6%
保健師国家試験	78	78	69	9	88.5%	89.7%
診療放射線技師国家試験	35	35	34	1	97.1%	83.0%

＜平成 21 年度 第2期卒業生＞						
試験種別	卒業生	受験者数	合格者数	不合格者数	合格率	合格率 全国平均
看護師国家試験	76	76	73	3	96.1	89.5%
保健師国家試験	76	76	68	8	89.5	86.6%
診療放射線技師国家試験	34	35	35	0	100.0	80.0%

※前年度に国家試験不合格であった卒業生が次年度に受験するケースがあるため、卒業生数より受験者数が多い場合がある

資料6-1-①-3 研究科生の修了状況

＜平成 23 年度＞	
	修了生
看護学研究科	5
診療放射線学研究科	2
計	7

＜平成 22 年度＞	
	修了生
看護学研究科	4
診療放射線学研究科	3
計	7

※研究科においては、長期履修制度選択者（在籍期間が3年以上の計画の者）がいるため、入学定員と修了者数に差が生じている

【分析結果とその根拠理由】

学部学生の卒業状況や資格取得状況、研究科生の修了状況から、教育の成果は十分に上がっている。

観点6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

平成 22 年度から合同 FD 委員会主催で実施しており、項目に対して5点満点で学生による授業評価を行っている。教養科目、専門基礎科目、専門科目のいずれにおいても、また講義、演習、実習、実験のいずれの授業形態においても、4点以上の得点を得ている。

【分析結果とその根拠理由】

学生による授業評価においても本学の授業は高い評価を得ており、教育の成果や効果は十分に上がっている。

観点6-2-①： 就職や進学といった卒業（修了）後の進路の状況等の実績から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

本学学生の進路状況については、資料6-2-①-1に示すとおりである。就職希望者の就職率は看護学部で98.7%、診療放射線学部で100%であり、進学希望者についても100%が大学院もしくは助産師課程等に進学を果たした。

研究科修了生は、原所属の医療機関への復帰者を含め、全員が就職している

資料6-2-①-1 卒業生・修了生の進路状況

＜平成23年度卒業・修了生＞								
学部・研究科名	卒業・ 修了者数	進路希望			進路状況			就職率 b/a
		就職希望(a)	進学希望	その他	就職(b)	進学	未定	
看護学部	83	79	4	0	78	4	1	98.7%
診療放射線学部	36	34	2	0	34	2	0	100.0%
看護学研究科	5	5	0	0	5	0	0	100.0%
診療放射線学研究科	2	2	0	0	2	0	0	100.0%
＜平成22年度卒業・修了生＞								
学部・研究科名	卒業・ 修了者数	進路希望			進路状況			就職率 b/a
		就職希望(a)	進学希望	その他	就職(b)	進学	未定	
看護学部	78	76	2	0	76	2	0	100.0%
診療放射線学部	35	33	2	0	33	2	0	100.0%
看護学研究科	4	4	0	0	4	0	0	100.0%
診療放射線学研究科	3	3	0	0	3	0	0	100.0%
＜平成21年度卒業生＞								
学部・研究科名	卒業・ 修了者数	進路希望			進路状況			就職率 b/a
		就職希望(a)	進学希望	その他	就職(b)	進学	未定	
看護学部	76	69	6	1	68	6	2	98.6%
診療放射線学部	34	32	2	0	32	2	0	100.0%
看護学研究科	※ 研究科が完成年度を迎えたのは平成22年度末であるため、修了生なし							
診療放射線学研究科	※ 研究科が完成年度を迎えたのは平成22年度末であるため、修了生なし							

※ 就職率は「就職を希望する者」のうち「就職を果たした者」の割合
 ※ 研究科修了生のうち、就職者は原所属の医療機関に復帰を果たした者を含む

【分析結果とその根拠理由】

就職・進学実績は非常に良好であり、学習成果は十分上がっている。

観点6-2-②：卒業（修了）生や、就職先等の関係者からの意見聴取の結果から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

看護学部は卒業予定者を対象とした調査を行った。調査の概要は、資料6-2-②-1のとおりである。平成22年度および平成23年度の卒業予定者159名に対して調査用紙を配付し、回収数は15部であった

(回収率 9.4%)。調査の結果、卒業予定者は、4年間に「看護技術」「看護課程」「対象の捉え方」などが身についたと評価していた(資料6-2-②-2)。また、4年間に「看護技術」や「病態生理」「解剖生理」などをもう少し身につけなかったと評価した(資料6-2-②-3)。さらに、授業の時期や順序性等の見直しを求める意見として、「国家試験・就職活動と両立できるよう実習・EBPの時期を工夫して欲しい」「EBPの開講時期を早めて欲しい」などと評価していた。加えて、現行のままでよいとする意見として、「人間の発達の順番通りに学べてよかった」「EBPの開講時期は問題ない」などと評価していた(資料6-2-②-4)

資料6-2-②-1 看護学部における卒業予定者に対する調査の概要

	対象者	平成22年度および平成23年度の看護学部卒業予定者 159名
調査方法	調査用紙	自作の「群馬県立県民健康科学大学看護学部の教育に関する調査用紙」を用いた。これは、次の問1から3より構成されている。 問1は、4年間に身についたと思うことを問う自由回答式質問であり、問2は、4年間に身につけなかったと思うことを問う自由回答式質問である。また、問3は、授業の時期や順序性等への意見を問う自由回答式質問である。
	データ収集	調査担当が直接、対象者に調査用紙を配付した。また、対象者に調査用紙と返信用封筒とともに調査の目的、意義、必要性、返信方法を明記した調査依頼用紙を配付した。また、返信用封筒を使用して調査用紙を個別に返信するよう依頼した。
	データ分析	各問ごとに意味の類似性に基づき会等内容を分類した。

資料6-2-②-3：卒業生および卒業予定者が4年間に身についたと思う内容

- 看護技術、看護過程 (各5)
- 対象の捉え方、コミュニケーション能力、問題解決の方法 (各4)
- 主体性 (3)
- 観察力、発達段階に応じた看護、個別性のある看護、態度 (各2)
- 対象の安全、(科学的)根拠に基づいた実践、疾患、教養、責任感や役割の重要性
自己責任、発表資料の作成方法 (各1)

注：()内は、回答数を表す

資料6-2-②-3：卒業生および卒業予定者が4年間に身につけなかったと思う内容

- 看護技術 (14)
- 病態生理、解剖生理、診療科別の看護 (各4)
- 薬理、自主性やリーダーシップ、倫理、一般教養、社会のマナー、クライアントを受け持つ実習 (各1)

注：()内は、回答数を表す

資料6-2-②-4：卒業予定者の授業の時期や順序性等に対する意見

●見直しを求める意見

- ・国家試験・就職活動と両立できるよう実習・EBPの時期を工夫して欲しい(9)
- ・EBPの開講時期を早めて欲しい(8)
- ・保健医療チーム連携論の開講を早めて欲しい(6)
- ・過密な時とそうでないときのバランスをとって欲しい(4)
- ・同じ学科目の授業が連続しないよう工夫して欲しい(3)
- ・看護技術学を1年次から開講するとよい(2)
- ・保健医療チーム連携論ⅡをⅠの直後に開講したほうがよい(1)
- ・学年ごとに試験期間をずらして欲しい(1)

○現行のままでよいとする意見

- ・人間の発達順番通りに学べてよかった(2)
- ・EBPの開講時期は問題ない(2)
- ・EBPは4年間の最後にふさわしい(1)
- ・保健医療チーム連携論・看護学研究Ⅰは4年生前期でよい(1)
- ・3年生から4年生にかけての春休みが長くて嬉しかった(1)

*その他

- ・専門基礎科目を充実させて欲しい
- ・国試対策をして欲しい

注：()内は、回答数を表す

診療放射線学部も、卒業生と就職先の上司に対する調査を行った。調査内容は、資料6-2-②-5のとおりである。平成22年度卒業生および就職先の上司、各35名に対して調査用紙を配付した。回収数は卒業生が9部(回収率25.7%)、就職先上司が29部(回収率82.9%)であった。

卒業生に対する調査の結果、本学で受けた教育を全体的に満足したと回答した者は66.7%であった。診療放射線技師の仕事を行う上で、「知識と教養を身についた」、「医療チームの一員としての職種と協力する上で役立つ」、「診療放射線技師としての法的・道徳的・倫理的視点で問題を捉える上で役立つ」という回答者が70%前後であるのに対し、「物事を批判的に思考する上で役立つ」、「人間を包括的に理解する上で役立つ」という回答は22%であった。また、診療放射線技師としての行動調査の結果は、「わからないことについて積極的に調べている」、「職場内での人間関係を円滑にするよう積極的に働きかけている」、「患者の人権やプライバシーが損なわれそうなどときは何らかの行動を起こしている」という回答者が各々70%以上存在した。自由記述には、「最新の放射線の知識、技術、機器の情報を得ることができた」、「研究を学会で発表できたことでプレゼンテーションの仕方や学会の雰囲気を知ることができた」という意見に加え、「画像読影、救急撮影など臨床場面で使える実践的な授業が必要」など問題点を指摘する意見も寄せられた。

就職先上司に対する調査の結果、卒業生は、「仕事への適応力」、「チームの一員として仕事を遂行する能力」、「専門的な知識や技術を習得しようとする努力」に対し60%前後の評価を得たものの、「問題解決能力」、「患者の状況の的確な把握」には35%前後の評価であった。参考までに、他校新卒者と相対的に比較した本学卒業生の総合的な能力に対する評価を受けたところ、66.7%が優れているとの結果であった。

資料6-2-②-5 診療放射線学部における卒業生および就職先上司に対する調査内容

対象者	調査内容
卒業生	<p>自作の調査用紙を用いた。これは、次の問1から8より構成されている。</p> <p>問1から3は、回答者の基礎情報（性別、診療放射線技師としての勤務状況、病床数）についての質問である。</p> <p>問4から7は、「本学で受けた教育の全体的な満足度」、「学習設備が十分であったか」、「診療放射線技師の仕事を行うにあたって本学で受けた教育が役立ったか（11項目）」、「診療放射線技師の仕事を行っている中でどのような行動をとっているか（10項目）」について、5段階リカーン型尺度を用いた質問である。</p> <p>問8は、本学の教育について思うことを問う自由回答式質問である。</p>
就職先上司	<p>自作の調査用紙を用いた。これは、次の問1から3より構成されている。</p> <p>問1と2は、回答者の基礎情報（性別、病床数）についての質問である。</p> <p>問3は、本学卒業生について「コミュニケーション能力」、「仕事への適応力」など、11項目について、5段階リカーン型尺度を用いた質問である。</p> <p>さらに、本学の教育についての意見や要望について自由記述による聴取を行った。</p>

【分析結果とその理由】

看護学部は今回の調査から、卒業予定者が本学看護学部の教育をどのように評価しているのかが明らかになった。この結果は、学習者の意見を反映した教育改善に活用可能である。また、卒業予定者が同様の内容であっても、それに対して異なる評価をすることも明らかにした。例えば、「看護技術」を身についたとする評価もある一方、身につけなかったとする評価もあった。また、「EBPの開講を早めて欲しい」とする評価もある一方、「EBPの開講時期は問題ない」とする評価もあった。これは、卒業予定者の価値基準が教育の専門的観点から確率されていないために生じている可能性が高い。また、この結果のみに基づき教育の成果を判断する危険性を示す。

今後は、就職先等の関係者、教育の提供者等の意見を聴取し、専門的観点から、本学の教育理念・教育目的・目標と関連づけながら学習成果が上がっているか否かを総合的に検討していくことが課題である。

診療放射線学部では、大学完成年から実施している卒業生および就職先上司からの意見聴取を今年度も実施した。その結果から本学の教育の成果や効果が上がっていると判断できる。しかし、教育に対する問題点も具体的に指摘されていることから、今後は過去3年分の卒業生および就職先上司に対する調査結果に基づき、学習成果を総合的に評価し、カリキュラムを検討していく必要がある。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

- 学生からの授業評価により、いずれの授業科目において高い満足度が得られている。
- 国家資格等の取得状況、就職・進学状況からみると、教育の成果は十分上がっていると判断できる。
- 看護学部卒業予定者の評価より、4年間に身についたと思う内容は、「主体性」「問題解決方法」「コミュニケーション能力」「責任感」「根拠に基づく実践」等、本学卒業生の特性の根幹となる内容が含まれており、教育の成果が上がっていると判断できる。

【改善を要する点】

看護師、保健師、診療放射線技師の国家試験合格率をさらに高い水準で維持できるよう、組織として一層の努力が必要である。